

## 編纂のあえぎ

川井銀之助

一生懸命巻頭に辭を書いても、誰もあまり讀んでくれないだろうと思つてゐる。自分もそうしたものを嘗て讀んだためしがない。そう諦めながら尙且つ筆をとろうとするのだから、よほど私にある何かの目的があるものと思つていただけたい。

或る詩人はいつた。西洋の文化を横の文化と云い、日本の文化を縦の文化と云う。たえず他と接觸し、たえず新しい刺戟をうけ、その領域を擴げるのが横の文化である。孤立した環境の中で、ただ自己を内省することによつてのみ單性生殖をするのが縦の文化である。ひたすら脚下の地面を下へ下へと掘り下げていつた文化である。地表は、一見祖先の素朴で原始的な様相しかなくとも、地下には深遠無量の意味が埋れている。

當否はいわず、この斷章を讀んでみて、私はあまりにもかりそめの凡人でありながら、純日本的な主義者であることを自認する。

生來私は昔を愛する。そして昔を語ることは何よりも樂しみである。そうした意味に於て、昔を語る資料を何に彼によらず蒐集するのが私の得意であり、私の道樂であり、私の惡癖である。人は私を収集マニアとでも云うだろう。

かりに由緒を誇るある物件に對して、これに關係のある人々の物語をきいてみると、必ずと云つてもよいぐらい、古い傳統と長い歴史を有する何々は、といつた調子の切口上で話しかけるものである。さて、それではそれを語るだけの資料をお持ちかと尋ねてみると、萬更そうではないことが多い。たとえば手近な例として、本學では昭和十二年の暮、鐵筋コンクリートの病舎を建てるために恩賜館を取りこぼしてしまつた。ところが、今その遺品がどこにあるかと尋ねると、どこにもないと答えるのが本音である。しかし本學の「一覽」には、明治十年七月皇居内の御寮屋二棟を病舎として本院に下賜されたものであるから、改築に際しても長く保存するようにと書いてある。外國から歸つてまもない頃恩賜館一件を聞いた私は、どうせそのうちに參考品はなに一つ残らないだろうと邪推し、方々を探しもとめてようやく棟瓦のひと揃いを拾い集めた。

拾い集めたと云えば體裁のよい云い譯であるが、人から云わせると全く文句づきの泥棒ともいえよう。しかし、こうした良性の泥棒があつてこそ、遺物の主要な部分が大切に保存されているのである。

追々新築の病舎や教室が學内を美化してゆくだろうが、これに伴うて由緒は益々破滅されてゆく。こうした點に於て都市計畫も同じことで、特にこれほど史蹟、舊跡を破壊するものはない。ひどいになると以前の町名まで一變したところもある。當事者に於てなんとか考へて貰いたいのが、我々昔を愛するものの切なる望みである。歴史が大きく轉換しつゝある今日、そんなことはと云われるならそれまでのこと、しかしいつかは尋ね求める人のあることを念頭において貰いたい。

明治八年、蹴上の坂道を改修した現場監督はよほど偉かつた人だと思ふ。堀り出した「南無阿彌陀佛」の石碑を路

傍に祀つたり、石垣の中に車石を利用して「車石」と標示したり、實に氣のきいた人だと通るたびにいつも感謝してゐる。

さて、そうした氣持の持主である私に、一昨々年、時の學長であつた勝教授から本學八十年史を編纂するよう仰せつかつたのである。學長の指名であるだけ私にとつて誠に光榮であるが、同時にまたそれは私にとつて大きな負擔でもありうる。

いかにはえぬきの者であるとはいえ、第一私にそれだけの文才がない。また一方には臨床科目を擔當する本職があるので、それだけの暇もない。どう考えても、私がその適格者でないことは明らかである。しかし、日頃敬慕する學長の指名だとすれば、その意に従うのが部下としての役目だと諦め、いよいよ工作に着手した。

すでに、そうした種類の記念號がいまままでに相當多數出ている。はなはだ失禮な云い分であるけれども、どれを見ても同じような筆法で、なんとなく固苦しい感じがする。それに横の廣さがあつても縦の深さがないので、何だか物足りない氣もする。この點何とかならぬものかと考えたすえ、こうした方面に興味を持つ、本學出身又は關係の諸先生に依頼して、まず八十年の道程を各時代に分割し、その得手々々によつて執筆して貰うことにした。御迷惑なことでありながら、幸い各執筆者から氣前よく引きうけて貰い、次のような内容で發足することにした。

## 序 說

横 田 稷

### 一、療病院時代

- |              |       |
|--------------|-------|
| (一) 木屋町療病院時代 | 川井銀之助 |
| (二) 粟田口療病院時代 | 中野 操  |
| 二、醫學校時代      | 土屋榮吉  |
| 三、醫學專門學校時代   | 片岡八束  |
| 四、醫科大學時代     | 宮田 一  |

即ち、本學の八十年史を四期に分け、そのうち療病院時代を更に二つに分け、初頭に、療病院開設に至るまでの経緯と云う副題を持つ序説をつけ加えた。

横田講師は私の教室員であり、醫史に關する趣味者であり、また文士である。私は教室同人からよいブレーン・トラストを得たものと喜び、何に彼によらずこの人の援助を求めた。なかなか熱心な中堅學徒であることをここに吹聴する。

中野博士が本學出身者きつての唯一な醫史學者であることは、すでに御承知のことだと思ふ。この人のために本學史の大半は成就したといえよう。それ等は、多くの刊行本となつて世間に發表されている。博士は日本醫史學會の關西支部長であり、雜誌「醫譚」の主宰者である。

土屋博士は醫學校時代の卒業生であつて、學生時代から校内の覇者であり、策者であり、辯士であり、又文學者である。老いてもなお若者を凌ぐ健康の持主である。自然また、學友會切つての人気者でもあることは云う迄もない。

片岡教授は現在の學長である。醫專時代の卒業生であつて、卒業後長らく京城醫專に勤務しておられたが、終戦後母校に迎えられた逸物である。頭の下さから、醫專時代のことは巨細にわたつてよく覚えていられる。公私とも日夜多忙であるにも拘らず、よくここまで執筆下さつたことを深謝する。

宮田一氏は本學豫科の教授であつた。英文學の大家で、今は本學の講師の職にある。本學陞格のいきさつに就ては、この人をおいて他にはない。それに豫科廢止後直ちに講師に任用された人であるから、その後の大學のあり方に就ても詳しい。つねに教務課と同居しておられる關係上、見聞も廣いわけである。

かような真に意義ある人達をスタッフとして編輯したのであるから、内容において、充分吟味されたエッセンスばかりであることは申し上げる迄もない。もしもどこかに誤謬とか脱落の缺點があるならば、それは執筆者の罪でなくて私の責である。

ただ、ここで一言斷つておきたいことは、八十年間の古いところほど詳細をきわめ、後になるほど多少省略した嫌がある。それは記事そのものが年とともに煩雜となり、容易に一括することが出来にくいからである。それに記録の多くが現存しているから、たゞ要點を適當に摘録したに過ぎない。かつは、我々の老婆心であるかも知れないが、向後百年史でもつくる人達のために一部をそのまま残しておきたいと思つたからである。

以上こうした編輯の仕方は、或は「一覽」のように筋道が通らないかも知れないが、そうしたことは「一覽」にまかし、主として今迄あまり知られなかつたことや、興味のあることに重點をおき、専らこれに肉付けしようとしたのである。

まずその準備として、度々座談會とか研究會を催して構想を練り、その間、各方面にわたつて手廣く資料とか參考品を涉獵した。お蔭で東京大學や京都府廳や各家の所藏品を見せていただいたり、寄贈していただいたり、また、いろいろの助言までたまわつた。そうした資料は卷末にまとめて掲載して、我々委員に與えられた御好意に對して深く感謝の意を表する。そしてそれ等の資料は、引用文献とか或は註として各時代ごとに書きそえ、詳しく知りたい人のために便宜をはかつた。

なお、本文で充分説明しきれないところとか、本文を讀んですぐ合點して貰えると思つたところに、なるべく多くの寫眞とか圖表をさし入れておいたから、讀者のためには一層便利であらうと思う。

それから、一番困つたことは固有名詞の讀みかたである。恐らくこれほど厄介なものはない。なんとか讀みたい、讀ませたいつもりで、勝手な振假名でもつけようものなら、時にはとんでもない大失敗を招くおそれがある。それでは折角の親切が親切にならないことになる。たとえば、青蓮院は「せいれんいん」でもなければ、「ししようれんいん」でもない。「ししようれんにん」が本當の讀み方である。およそかような始末であるから、どうか讀者は自己判斷で我流に讀んで貰いたい。しかし、こちらで分つているものだけには振假名をつけておいたから、安心して讀んでいただきたい。

次に附録として、前に述べた諸家所藏の參考資料品目のほかに、中央圖書館の赤星軍次郎主任に依頼して、年表を編纂して貰つた。氏は永年勤續の生字引であるから、今回の年史をつくる上にも色々の書物を參考とすることが出來、また、色々の援助を仰ぐことが出來た。そうした人のつくつた年表だけに、將來大いにまに合うものと思つてい

た。ところが遺憾なことには、氏は都合あつて完結するに到らなかつたので、横田講師に依頼してその大半を補足することにした。

索引が非常に便利なものであることは誰にも分つてゐるが、さてこれをつくるとなると、これまた非常な面倒がかかる。しかし、校正の時にひと通りは讀まなければならぬので、簡單ではあるけれども、人・件名を取纏めることにした。また、あまり詳しくすぎても年表と重複する嫌がある。専ら横田講師の勞を煩した。

なお別に、各教室とか各職場、或は花園・伏見兩分院、附屬女子醫學専門部、看護婦學院等の沿革史をそえるつもりでそれぞれ手配してみたが、あまりにも反應がなかつた。中には随分詳しい報告をしていただいた教室もあつたが、原稿の不揃いと體裁の不一致から、今回は遺憾ながら省略することにした。しかし、それでは原稿をいただいた教室には甚だ申し譯がないので、内容の一部を本文に取り入れ、また原稿は、そのまゝ、座談會の記録と一緒に圖書館の方で保存することにした。

今度片岡學長の肝煎で、本學史料室が圖書館の所管で、別に設けられることになつてゐるから、ゆくゆくは、そうしたものが全部ひと纏めになつて保管され、展覽にも閲覧にも便宜をはかることになつてゐる。

さて、我々は初めから、こうした大事業はどうせ長の月日を要するだろうと思ひながら、覺悟の上ではせめて二年後の秋頃までには完成したい心積りでいた。それは物には時機と云うものがあるからである。しかし本格的に着手してみると、熱心な製作意欲から考證的な苦惱があつたり、また眞剣な藝術的見地から體裁上の煩悶があつたりして、とうとう今日に立ち至つた。

しかし悉くが各分擔執筆者の不斷な努力の傑作であるだけに、この異色大作が讀者の面前に展開された暁には、恐らく讀者の關心からある何物かを把握するだろうと幻想する。事實、そうあつてこそ、執筆同志はそれによつて今迄の苦勞を忘れることが出来るのである。反面、私はこれ等同志の方々に對して厚く御禮を申し上げたい。

また、この事業に、初めから有らゆる理解と多大の援助をたまわつた勝前學長を初め、片岡學長、角田名譽教授、伊吹前事務局長、海老瀬庶務係長、村瀬學生係長、東村營繕係長、水越治博士、吉田幸雄學士に對して深甚の謝意をささげる。

なお、木屋町、栗田口兩療病院址に記念碑を建立するにあたり、つねに寛大な處置と、色々の便宜をとり持つていただいた市當局の方々、別けて笹部建設第二係長、齋藤技術吏員、又青蓮院東伏見門跡、同永井執事長に感謝の微意を表し、併せて新谷石匠の勞を多とする。

追て、本史の題字は土屋博士の執筆になるものであり、挿入の寫眞の撮影と配置は、ひとり横田講師の苦心の作によるものである。なお初め、見返しと裝釘にもう少し腐心するつもりでいたが、豫算の都合で思い切らなければならぬ破目に陥つたことは、我々の熱情に比してその佞しきは意外にも大きい。

ついでながら、栗田口療病院址に建てた記念碑の表字は片岡學長の筆であり、木屋町療病院址の分は拙筆であることを參考までに附記する。(昭和三十年六月一日)